



「星に願いを2013」

★夏の夜空のお楽しみ

今年も8月の12日から13日にかけて、年間三大流星群の一つであるペルセウス座流星群が見頃を迎えます。宇宙を漂う星くずが地球とぶつかり、大気中で光を発しながら燃え尽き、流れ星(流星)になります。流星群は、彗星が通り道に残していった星くずの束が地球が横切るときに見られる現象で、いわば彗星の置き土産なのです。

★輝きの源は、謎のかけら

彗星の正体は、例えて言えば砂や泥交じりの雪だるまのようなもので、冥王星よりずっと外側、太陽系の外縁部からやってきます。地球やほかの惑星と同じ太陽系の一員で、同じく約46億年前に誕生したと考えられている彗星ですが、

詳しい組成や、なぜそんなに遠くからやって来るのかなど、多くの謎を秘めています。流星群の輝きを詳細に観測・分析することで、彗星の組成を知り、その謎に迫ろうとする研究もおこなわれています。

ちなみにペルセウス座流星群の母天体はスイフト・タットル彗星で、133年かけて太陽の周りをまわっています。その置き土産である流星群は、太陽系の最果てからの手紙、と言えるかもしれません。

★上を向いて歩こう

花火のような彩りや派手さはありませんが、星空の中を流れる一瞬の輝きには、静かな美しさがあります。7月末から8月中旬ごろにかけて流れ星に出会える確率がぐっと上がりますので、願い事のある方もない方も、晴れた夜にはぜひ星空を見上げてみてくださいね。



鉄の塊でできているナンタン隕石。ハレー彗星の観測などから彗星は氷が主成分と考えられており、一方隕石の母天体である小惑星はおもに岩石や金属からなると考えられています。いずれも太陽の周りを回る小天体ですが、お互いの関係についてはまだよくわかっていません。



毎日暑い日が続きます。体調管理に十分気を付けて残りの夏も楽しみたいものです。

さて、熱中症の対策としては、水分補給と同じくらいに塩分補給が大切です。人は塩なしには生活してゆけません。今回はそんな塩に関するお話です。

塩津中学校の西側、なだらかな斜面の中腹あたりに、月田遺跡があります。昭和58年に、西迫地区のほ場整備の最中に発見された遺跡で、翌59年に発掘調査が行われました。

発掘調査の結果、みじかい棒のようなもの(写真参照)が何本も出土しました。これは、塩づくりに用いられた土器製塩土器の破片で、今から1200年ほど前に作られたものです。

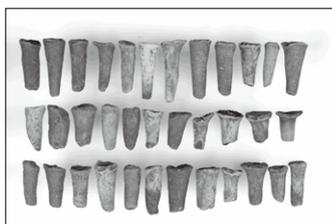
製塩土器は、「うつつわ」と「あし」

～古代の塩作り～

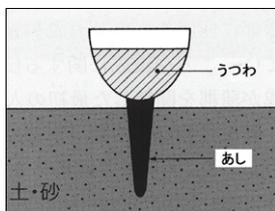
の部分からなっています。(図参照)出土した破片は、すべて「あし」にあたる部分です。製塩土器は地面に突きさして使われました。「うつつわ」に海水を入れ、天日で水分を蒸発させて、塩を作ったと考えられています。

ところで、なぜ出土した製塩土器は、「あし」の部分だけなのでしょう。それは、「うつつわ」の部分がかわれてなくなってしまうことによるものです。土器のすきまに塩が入り込むと、土器はとももろくなります。また、熱効率を上げるため、「うつつわ」はもともとうすく、こわれやすく作られていました。

この製塩土器は、わずか3センチぐらいの小さな破片ですが、ふるさとでくらしした先人の様子、古代の蒲郡で塩作りが行われていた事実を、今の時代に伝えていきます。



写真(月田遺跡の製塩土器)



図(製塩土器のしくみ)